

# 唐とテュルク人・ソグド人

## ——民族の移動・移住より見た東アジア史——

石見 清裕

### はじめに

人類の歴史の上で、人々が民族単位で長い距離を移動し、移動先に移住し、それによって社会構造や地球環境に大きな変化をもたらし、進むべき歴史の方向を決定づけるというできごとが、これまでに何度か生じた。たとえば、紀元前20世紀以降にバルカン半島、イタリア半島、イラン高原に移動したインド・ヨーロッパ語族は、古代ギリシア・古代ローマというヨーロッパ文明の原型を形成し、ペルシアによるオリエント世界の統一をもたらした。また、紀元後9世紀の遊牧ウイグル崩壊を契機として始まるテュルク民族の西方移動は、中央アジア・西アジア・北アフリカのイスラム世界の国家体制や社会構造を大きく変化させ、モンゴルによるユーラシアの大部分の一体化を用意した。さらには、16世紀以降本格化するヨーロッパ人の新航路による移動と移住は、世界の経済関係を一変させてその一体化をもたらし、やがては産業革命を準備して、人間の社会構造と地球の自然環境に決定的な変容をあたえた。

このような大きな変化をもたらしたできごとと並んで、むしろこれらに匹敵するほど人類の歴史に大きな作用をおよぼした世界史の転換として、紀元後4世紀に始まる北方遊牧民族の移動・移住があげられる。これは、ユーラシアの北方ステップ地帯の遊牧民が南下する移動として現れ、牧畜業と農業の境界線をうち破り、両生業の複合する地帯的な一体化をもたらし、それが既存の世界の構造を変化させ、以後の歴史の展開に新たな幕を開けたのである。この移動は、ヨーロッパではゲルマン民族大移動をひきおこし、グレコ・ローマンの古典社会を崩壊させて中世ヨーロッパ世界を形成した。一方、東洋に目を向けると、秦漢時代に完成された中国の古典文明社会を崩し、五胡十六国をへて南北朝という新しい局面を切り開いた。

忘れてならないのは、上述の民族の移動は決して単発的に起こるのではなく、数世紀にわたって断続的に生じるということである。中国史では、4世紀に始まった北方遊牧民族の移動・移住の何度目かの波が、北魏末期の六鎮の乱となって現れ、この民族移動の波が中国華北に押し寄せ、それが隋唐王朝に結実した。本プロジェクトのテーマである古代日本と東アジアの交流も、こうしたユーラシアの民族移動および既存の社会構造の変化と決して無関係ではないのである。

## 1 隋・唐成立につながる民族移動

六鎮の乱は、北魏が陰山山脈一帯から河北長城の北に配備した北辺軍鎮の一つである沃野鎮で、523年に鎮民の破六韓拔陵が鎮將を殺害して挙兵すると、これが北魏に不満をもつ柔玄鎮民の杜洛周や懷朔鎮民の鮮于修礼らの挙兵を呼び起こし、こうして一大反乱に発展した。各鎮の反乱軍は決して一枚岩ではなく、やがて彼らが南下すると、反乱軍と対抗する者、反乱軍に合流する者、在地の防衛軍をつくる者などをまきこみ、さらにはそれらが北魏軍とも合流・衝突をくりかえし、華北は大混乱に陥った。この混乱の中から、北秀容（山西省朔県付近）に大家畜群を有する酋豪の爾朱栄が反乱軍を破って台頭し、首都の洛陽に乗り込んだ。爾朱栄自身は都で暗殺されたが、その後の爾朱氏一族の専横によって北魏の統治力は急速に衰えた。かわって北魏の実権を掌握したのは懷朔鎮出身の高歓で、東魏（後の北齊）の建国者となった。一方、西方では長安を中心に、武川鎮出身の宇文泰が、東魏とは別に北魏皇族を皇帝に推戴して西魏（後の北周）を建国した。宇文泰とともに西魏建国にかかわった者の中に、同じ武川鎮出身の普六茹忠という北族出身者がいて、その子が隋の初代皇帝となった文帝楊堅であり、おなじく大野虎の孫が唐の初代皇帝となった高祖李淵である。

それならば、六鎮の乱を契機に華北に移動してきた者たちは、どのような文化をもった人たちだったであろうか。それを伝えるエピソードとして、『北齊書』巻15、庫狄干伝には、

庫狄干は漢字を知らず、署名するときに「干」を上下さかさまに書いた。

と記され、さらに続いて、

武將の王周なる者は、署名する際に「吉」を先に書き、それから外側を書いた。

と記されている。また『北史』巻54、斛律金伝には、

斛律金は字を阿六敦といい、朔州の勑勒（テュルク）部の人。……性質は素直であつたが、漢字を知らなかった。本名は敦であつたが、その字が難しいので、書きやすいように名を金と改めた。それでも「金」の字が書けなかったので、司馬子如という者が屋根にたとえて「金」の字の書き方を教え、ようやく書けるようになった。

とある。おそらく司馬子如は、屋根に続いて梁・天井・柱・夫婦・床の順にたとえて教えたのであろう。おそらく斛律金の本名は、阿六敦に相当するトルコ語であろう。なぜならば、トルコ語で金は altun といい、阿六敦はその漢字音写で、改名した「金」は本名の意識だと思われるからである。六鎮の乱で中国内地に移住したのは、このような者たちであった。

ところで、華北が六鎮の混乱にまきこまれていたころ、北方のモンゴル高原でも大きなできごとが起こった。遊牧帝国の柔然が崩壊し、かわって突厥（テュルク）の遊牧帝国が成立したのである。モンゴリアで突厥が勃興し、ちょうどそのころ六鎮の乱によって華北の防備ラインが崩壊したのであるから、新たに勢力を強めてきた突厥の影響は当然華北に及んできた。『周書』巻50、異域伝突厥の条には、

突厥の他鉢可汗は徐々に傲慢となり、「南に二人の孝行息子がいれば、わが国に物資不足の恐れはない」と豪語した。

と記されている。この南にいる「二人の孝行息子」とは、北齊と北周を指しているのは間違いな

い。北周が突厥と手を結べば、北斉としては挟み撃ちにされる危険性が生じるので、自己も突厥と手を結ぼうとするのであり、両国から突厥への貢ぎ物が盛んに贈られるのである。

ところが、中国が隋によって統一され、その隋が国力を増してくると、モンゴリアの東突厥内部での権力争いもあって、中国と突厥の関係は逆転した。しかし、煬帝の大運河開鑿工事と度重なる高句麗遠征に疲弊した民衆の不満から隋末の乱が起こると、中国内は群雄割拠の状態になり、ここにモンゴリアと中国の勢力関係は再び逆転した。華北の群雄からは頻繁に貢ぎ物が突厥に贈られ、それらの使節どうしが互いに道で出会うほどだったという。理由は「二人の孝行息子」とまったく同様である。やがて、群雄割拠が唐によって徐々に統一されてくると、突厥と唐とは必然的に正面衝突せざるをえなくなった。唐の第二代太宗の貞観4年（630）、たまたまモンゴリアを大冷害が襲い、家畜に大きな被害がでると、これを好機とみた唐は突厥に総攻撃をしかけ、こうして突厥はいったん滅亡し、モンゴリアは唐の支配下に入った。この時に、合計120万人といわれる突厥人がモンゴリアの混乱を逃れ、華北に移住した。彼らの多くは唐の騎馬兵に組み込まれ、やがて太宗はテュルク人から天可汗の称号を贈られ、ここに唐の軍事的優位が確立されたのである。

つまり、唐の成立とは、南モンゴリアと華北で形成される地帯の統一の完成体なのであり、五胡十六国から北朝をへて徐々に形成されてきた牧畜業と乾燥農業との融合文化の到達点である。その勢力が長江中下流域に及んだものであって、決して農耕中国の統一ではない。唐の前半期には、現在の福建・広東・広西壮族自治区といった南シナ海沿岸地方は、いまだ完全には中国政権の領域にはなっていなかったのである。

## 2 玄奘の伝えた内陸アジア

ところで、唐が成立したころ、西方の世界はどのような状況だったであろうか。というのも、中国の歴史に外部より強い影響を与えるのは、まず北方の勢力であり、ついで西方の世界だからである。上述のように、唐の初期には中国の南部沿岸地帯はまだ唐と政治的に直接つながっておらず、東方は東シナ海で区切られており、モンゴリア南部と華北で形成される地帯に強力な政治的統一体が樹立されれば、それと密接な関係をもつ地域は西方の中央アジアにはかならないのである。

幸いなことに、唐初期の中央アジアの状況は、『西遊記』三蔵法師のモデルとして知られる玄奘三蔵が伝えてくれる。彼のインド留学旅行記である『大唐西域記』と、弟子が玄奘の伝記として記した『大慈恩寺三蔵法師伝』がそれである。どちらも、一流のインテリが現地で見聞した情報をもとに記されているので、当時の中央アジアを知る格好の史料となっている。

玄奘は、太宗朝の貞観年間の初頭に中国を出てインドに向かい、貞観19年（645）に長安に帰った。往路・復路ともに、中央アジアを陸路で旅行した。ただし、同じ陸路であっても、往路と復路では異なるルートをたどっており、その貴重な情報が大変に役立つのである。

まず、往路から見てみよう。河西通廊を西行した玄奘は、瓜州（甘肅省安西）より西北のハミに向かい、そこから西行して高昌国（トゥルファン）に至った。彼が敦煌から楼蘭に向かわなか

ったことは、後述するとおり大変重要である。

中国から来た青年僧を自国に止めようとした高昌国王の鞠文泰であったが、玄奘の求法の意志が堅いことを知ってそれをあきらめ、かわりに玄奘が無事にインドまで行けるように、彼は西突厥の葉護可汗に絹500疋と馬車2台分の果物を贈り、次のような手紙をしたためた。

玄奘法師は私の弟ともいえる者で、婆羅門国に求法しようとしています。願わくは可汗にあらせられては、私を憐れむように法師を憐れんでください。そこでお願いいたします。西方の諸国に命令を下し、鄯落馬（ウラーク、公用の駅伝馬）を供給して、玄奘を送り届けて境域を出させてあげてください。（『大慈恩寺三藏法師伝』巻1）

鞠文泰は、同時に高昌国より西方の国々の王にも手紙を書き、綾絹一疋を贈って玄奘の通過を依頼したので、玄奘はそのルートで西に向かい、カラシャール、クチャを経由してアクスに到達し、これより北方に向かって天山山脈を越え、イシック・クルの湖畔に出て、その西のスイアープに到着し、ここで西突厥の葉護可汗に面会した。玄奘は、スイアープの様子を次のように記している。

清池（イシック・クル）より西北に五百余里行くと、素葉水城（スイアープ）に至る。町の周囲は六、七里で、諸国の商胡が雑居している。……スイアープより西には数十の町がある。それらの町はみな君長を立て、お互いに命令を受けずに独立しているが、そうはいってもすべて突厥の支配下に入っている。スイアープから羯霜那国（ケッシュ）に至るまでの地域は、窣利（ソグディアナ）と呼ばれている。（『大唐西域記』巻①）

ここに見える「諸国の商胡」とは、ソグディアナからスイアープにやって来るソグド商人である。スイアープ以西のソグドのオアシス国家はみな西突厥の支配下にあり、それらから来た商人が可汗の本拠地で雑居していたというのである。

スイアープを出発してタシケントに到着した玄奘は、当地を次のように記す。

緒時国（シャーシュ、タシケント）は周囲が千余里あり、西方は葉河（シル・ダリア）に臨む。……町は数十あって、それぞれが別に君長を立てている。全体をまとめる王はいなくて、それらの町は突厥の支配下にある。（同前）

ここでも玄奘は、タシケントが西突厥の支配下に置かれていたことを伝えている。さらに、玄奘自身の記録ではないが、タシケントの南西のサマルカンドについて、『唐会要』巻99、康国（サマルカンド）の条には、次のように記される。

サマルカンドの人々は土着の民であるが、突厥の支配下に入っている。……彼らは目が深く鼻が高く、髭が多い。彼らは、子供が生まれると、必ず蜜を赤子の口に入れてなめさせ、ニカワを手の中に置く。成長したその子が、口からは甘い言葉を吐き、ニカワが物をつけるように手に銭を握るよう願って、それを行うのである。習俗は商売に長けていて、ほんのわずかの利益でも争う。男子が20歳になれば行商のために他国に送り、中国にもやって来る。

ソグド人が根っからの商業民であることを伝える有名なエピソードであるが、ここでもサマルカンドが西突厥の支配下にあったことを伝えている。

そもそも、内陸アジア乾燥砂漠地帯のオアシス都市は、乾燥農業を基本的な生業とするが、それだけでは物資不足を生じるので、不足を補うために中継貿易や遠距離交易を行う。ブハラ（安

国、安姓）・サマルカンド（康国、康姓）・タシケント（石国、石姓）・ケッシュ（史国、史姓）といったオアシス都市のソグド人こそが、その代表的な姿である。ところが、彼らがキャラバン隊をしたて、ラクダの背に金目の財貨を積んで交易に出向けば、それは盗賊の格好の餌食となってしまう。事実、玄奘は『大慈恩寺三藏法師伝』巻2で、ソグド商人がカラシャール近郊で盗賊に襲われた情報を伝えている。彼らにとって最大の関心事は交易の無事なる完遂であり、そのためにはそれが実現できるだけの保護力が必要となる。その保護力として最も頼りになるのは、北方ステップ地帯の遊牧民の武力に勝るものはない。そこでオアシス都市は、西突厥の支配下に入るのである。

一方、北方ステップの民の生業である遊牧は、農耕ほどは貯蓄のきかない経済であるので、こちらも物資不足を補うものとして、交易が必要となる。突厥とて例外ではなく、事実『周書』異域伝突厥の条には、勃興したばかりの突厥について、次のような記事を載せている。

土門（テュメン）という王が後を継ぎ、突厥の部落はだんだん盛んになっていった。そこで、初めて長城のほとりに使者を送り、絹を買い、中国との通商を願い出た。大統11年（545）に西魏の宇文泰は、酒泉のソグド人安諾槃陀を突厥に派遣した。突厥の民は、みな互いに、「今、大国の使者がやって来た。我が国がまさに興ろうとしているのだ」と喜びあった。

このエピソードこそ、遊牧民が遊牧国家として発展するために商業が必要であったことを如実に物語っている<sup>11)</sup>。実は、ウイグルのカラバルガスン、モンゴルのカラコルムなどの都市は、そこにウイグル人やモンゴル人だけが居住しているわけではない。これら遊牧帝国の首都と呼ばれる都市は、むしろ外国使節や外国商人のための町なのである。諸国の商胡が雑居していたスィアールプも、そういう都市だったに違いない。630年に東突厥が滅んだとき、モンゴリアから唐に移住して来た突厥人に混じって、集落のリーダー的な存在としてソグド姓の者が史料に現れるので、ソグド商業は東突厥の中心部ともつながっていたと思われる。遊牧民が遊牧帝国として発展するためには、ユーラシアの商業権をおさえることが不可欠であり、一方オアシス商業民はその保護下に入ってはじめて安全は取引が完遂できたのである。そして、遊牧帝国の可汗は、諸国からもたらされる貴重な財貨に囲まれて権力が形成されるのであり、その財貨を功績ある者に分配して権力を強めるのである。この点は、わが国の天皇や貴族の権力を考察する上でも参考になるであろう。

さて、玄奘の記録にもどって、インドからの復路の様子を彼はどのように伝えたであろうか。

玄奘は、現在のパキスタン、アフガニスタンを通り、東にパミールを越え、カシュガルに出て、そこから崑崙山脈の北麓を通して楼蘭まで至り、ここで旅行記を終えている。その途中、ニヤからエンデレに立ち寄った際に、玄奘は、

ニヤから行くこと四百余里で、覲貨羅（エンデレ）という古い国に至る。この国は久しい間空っぽで、町は荒れ果てている。（『大唐西域記』巻12）

と記している。さらに、そこから東のチェルチェンを通った時のこととして、

エンデレから行くこと六百余里で、折摩駄那という古い国に至る。すなわち、チェルチェンの地である。城郭は高くそびえてはいるが、人煙は途絶えてしまっている。

と記している。すなわち、玄奘の時代、崑崙山脈北麓のルート（西域南道）はすっかり寂れてお

り、内陸シルクロード交易は主として天山沿いのルートによって行われていたことがわかる。

そのシルクロード交易にたずさわっていたのはソグド人であり、彼らの商業利権を牛耳っていたのは突厥であった。ところが、モンゴリアの東突厥は唐によって滅ぼされ、天山北方の西突厥も間もなく衰えて唐の支配下に入ると、ソグド商業の保護力は失われ、かわって彼らは唐の保護に頼るようになる。その結果、ソグド商業圏が長安と結びつくこととなったのである<sup>(2)</sup>。

### 3 固原の史氏一族

さて、唐代の中国に国際色豊かな文化が形成された要因について、従来の学界ではおおかた以上のように考えられてきたといつてよいであろう。ところが、近年それだけでは不十分だと考えられる出土史料があいついで発見された。

1981年より、寧夏回族自治区固原県南郊村の墓地遺跡群で、寧夏固原博物館考古隊・中日原州聯合考古隊による発掘調査が始まり、その結果6基のソグド人墓が確認され、それらから合計7点の漢文墓誌が収集された<sup>(3)</sup>。墓数と墓誌数が一致しないのは、6基のうちの1墓から夫婦別々の2点の墓誌が出土したからである。それらによれば、墓主の男性6人はいずれも史氏を姓とし、墓誌文からケッシュ出身のソグド人であることが判明し、1点の夫人墓誌の姓は安氏で、プハラ出身のソグド人女性であった。男性6点の墓誌の中には夫人合葬墓誌も含まれ、その刻文から夫人は康氏・安氏のソグド姓であり、やはりソグド女性どうしの婚姻が確認され、固原にソグド人聚落の存在したことがもはや動かせなくなった。

この報告に接した当初、多くの研究者がまず抱いた疑問は、なぜ固原なのかという点であった。現在、西安と河西方面を結ぶルートとしては、鉄道や高速道路が通っている関係からであろうが、渭水沿いに蘭州を経由するルートが想定されがちであろう。史氏の墓誌文からは、彼らがモンゴリア経由ではなく、河西地方から固原に移住したことはまず間違いないのであるが、蘭州経由のルートでは固原を大きくはずれるのである。しかし、徒歩や馬車・乗馬で交通するのであれば、武威（涼州）から蘭州に向かうと、途中で海拔2500メートル以上の烏鞘嶺を越えなければならない。一方、武威から東行し、銀川南方の中寧付近で北流黄河を渡り、そこから東南方向の長安に向かうと、清水河に沿っておのずと固原に出るのである。かつてはこのルートが用いられていた証拠として、固原付近で収集され、寧夏固原博物館に所蔵される五胡十六国・前秦時代（380年）の墓表の裏面に、

碑表及送終之具、於涼州作致。（この墓表と葬儀に用いた道具は、涼州で作成してここに持って来た。）

と刻される史料があげられる<sup>(4)</sup>。

さて、7点の墓誌のうち、時代的にもっとも古いのは、隋・煬帝の大業6年（610）刻「史射勿墓誌」である。墓誌文によれば、墓主は北周時代にすでに都督として数度の軍事行動に従っており、隋では右領軍配下の驃騎府の将軍に任命された軍人であった。彼の率いた軍は、当然ソグド人聚落に置かれた軍府の郷兵と考えるのが妥当であり、しかも墓誌文に記された先祖の記述を見ると、彼らは北魏末期には中国に移住しているのである。ここにいたって、われわれは、唐代

の中国に在住したソグド人という、東西突厥滅亡の結果、商業圏が中国とつながったために移住した商人であるという考え方を、再考しなければならなくなったのである。

さらに、この史射勿の長男にあたる「史訶耽墓誌」を見ると、墓主は隋末の乱に際していち早く長安におもむいて唐政権と手を結び、長安西方の群雄の薛挙と戦い、唐の関中平定に一役買っていることがわかる。さらに彼は、唐・高祖の武徳年間（618～626）には長安城北門の玄武門で馬の管理を任されているので、武徳9年6月4日に太宗がクーデターを起こして実権を握った玄武門の変にもかかわった節があり、太宗朝では中書省に宿直して宮廷の通訳官として勤めたのである<sup>(5)</sup>。

また、史訶耽の甥にあたる「史鉄棒墓誌」からは、墓主は固原の国営牧場の監督の任にあたり、唐が建国された当初は国馬が不足していて、それを唐は固原の牧場によって馬を補い、固原には早い段階で国営牧場が設置されたこともわかるのである<sup>(6)</sup>。

#### 4 長安その他の地域のソグド人墓

1999年に太原市晋源区王郭村の古墓から隋代「虞弘墓誌」が出土し、墓誌文の記述からソグド人墓であることが判明した<sup>(7)</sup>。墓誌によれば、虞弘の父は突厥勃興以前にモンゴリアを制圧していた柔然の官職に就任しており、北斉や吐谷渾などにも使者として派遣され、モンゴリアから太原付近に移住したようで、この一族がかなり広範囲を移動したことが知られる。中国移住後、虞弘自身は北斉に仕え、左丞相府の配下として并・代・介三州の郷団を率い、薩保府を検校した。この「薩保」とは「薩宝」とも表記され、ソグド語の *sartpaw* の漢字音写である<sup>(8)</sup>。本来の意味はキャラバンの隊長であるが、中国における「薩保」「薩宝」は、隋以前の時代にはソグド人聚落のリーダーを表す官職であり、唐以後はゾロアスター教の司祭を意味した<sup>(9)</sup>。つまり、北斉・隋の時代に太原にはソグド人集落が存在したのであり、虞弘はその郷団兵を率いたと考えられ、さらには并州（太原）とともに代州（山西省代県）・介州（同汾陽県）も並記されているので、これらの地にもソグド人集落の存在した可能性が高いのである。同時に、虞弘墓の石棺には、ソグドの胡旋舞やペルシア伝統の獅子狩り文様や動物との闘争文様が彫刻され、ソグド美術の鮮やかさを印象づけたのであった。

2000年には、西安市大明宮遺址北方で北周時代の安伽墓が発掘調査され、見事な色彩彫刻のほどこされた石棺床とともに墓誌が発見された<sup>(10)</sup>。石棺床のパネルには、胡旋舞の外にパオの中で突厥人と見られる遊牧民と歓談または交渉するソグド人の姿などが彫刻され、また墓門上部には3頭のラクダの背上で燃え盛る炎や、下半身が鳥のスラオシャ神などのゾロアスター教の意匠がえがかれていた。墓誌には、墓主安伽の官職を「同州薩保」と記しており、北周時代の同州（陝西省大荔県）にもソグド人聚落の存在が確認されたのである。

2003年には、同じく大明宮遺址北方の井上村で北周時代の史君墓が発見され、ソグド意匠による彫刻のほどこされた見事な石棺と、その石棺の扁額のような形態の墓誌が出土した<sup>(11)</sup>。そこには、ソグド文33行、漢文18行が刻されていた。

さらには、2004年にも同じく大明宮遺址北方で北周時代の康業墓が発掘され、漢文墓誌が発見

された<sup>(12)</sup>。同墓誌は2007年末の時点でいまだ未発表であるが、サマルカンド出身のソグド人であることは間違いない。

また、これらの新出土史料だけでなく、2005年には山下将司氏によって、『文館詞林』巻455所載の文献が実は「安修仁墓碑銘」残巻であることが確認された<sup>(13)</sup>。それによって、安修仁の祖父は西魏の雍州薩宝であり、安修仁自身は河西地方の涼州（武威）でソグド人郷兵を統率し、隋代には武官を歴任しており、隋末の混乱期には河西の群雄李軌を支持したが、後にそれを倒して長安の唐政権と連携したことがわかってきた。

さらには、安修仁の甥にあたる安元寿は太宗の昭陵に陪葬され、墓誌は昭陵博物館に所蔵されるが、その墓誌文によれば、元寿は唐建国後は秦王（後の太宗）の幕府に入り、武徳九年の玄武門の変に際しては長安城の宮城と掖庭宮を結ぶ嘉猷門の守りを固めていたことが知られる<sup>(14)</sup>。

従来は、ソグド人というと商人をイメージし、中国に唐という安定した大国の政権ができたので、それとの通商を求めて中国にやって来たと考えられがちであった。それはそれで決して間違いとはいえないのであるが、上述のように新出史料に基づいて検討すると、彼らの一部はすでに唐成立以前より、おそらくは北魏末期には中国に移住して各地に集落を形成しており、そのようなソグド人は商人というよりはむしろ武官として活動していたことが明らかになってきた。つまり、従来の考え方では十分ではなかったのである。しかも、そのようなソグド人の中には、柔然と関係をもった者や、北周・隋の軍事上の一翼を担った者、隋末の乱で唐に加担して軍事行動を起こした者、さらには太宗の玄武門の変で一役買った者もあり、北魏崩壊から唐建国までの歴史の流れの中で、無視できない存在として登場するのである。

ここに至ってわれわれは、五胡十六国から唐代までの歴史を、華北と南モンゴリアの動きだけでなく、より広い視野のもとで、ユーラシア東半部の大きな民族移動・移住のうねりが唐王朝の成立へと収斂してゆく姿として、いまや再検討しなければならない必要に迫られているといえるのである。

## 5 ソグド系突厥という概念

上述したように、唐建国以前に中国に移住して集落を形成し、軍事活動に参加するソグド人がいたことは間違いないが、しかしながら、そうはいつても、東・西突厥の崩壊にともなって中国に移住したソグド人がいたことも、一方ではまた事実なのである。ただし、ソグド人というと商人を想定するため、突厥から唐に移住したソグド人も本当に商業に従事したのか、あるいは別の生業を営んだのか、これまではその具体的なイメージがつかめなかったのである。このような状況下にあって、近年学界では「ソグド系突厥」という概念が提唱され、それによってわれわれはこの問題を考える手がかりを得られるようになってきた。

ソグド系突厥とは、スペイン系アメリカ人や日系ブラジル人などと同様の言い方で、血統や身体的特徴はソグド人でありながら、言語や生活習慣などの大部分は突厥人の文化を身につけた者を指す。このソグド系突厥の概念があてはまる一つの例をあげてみよう。『元和郡県図志』巻4、新宥州の条に、次のように記される。



調露元年（679）に、靈州の南に魯・麗・含・塞・依・契の六州を置き、突厥から降ってきた者を住ませた。時の人はこれを「六胡州」と呼んだ。

ここに見える靈州とはオルドス西部の地で、治所は現在の呉忠に置かれ、六胡州はその東南に置かれたと思われるが、具体的な場所は史料がないために特定できなかった。1985年に、寧夏回族自治区塩池県の西北48キロメートルの砂漠の中で、岩を穿って作られた六基の唐代の墓が発掘調査され<sup>(15)</sup>、その一つから武則天の時代の「何君の墓誌」（名は摩滅して判読不能）が出土し、そこには次のように刻まれていた。

（何君は）久視元年（700）九月七日に魯州の如魯県の自宅で死亡した。享年は八五であった。その月の二八日に町の東の石の洞窟に埋葬した。

ここに六胡州の一つである魯州が登場し、その場所がこの墓群の西であったことが確定され、つまり六胡州は現在の呉忠と塩池の境界に分布していたと考えられるのである<sup>(16)</sup>。墓主の姓「何」は、クシャニヤ出身のソグド人の中国姓であり、同墓群の別の墓の石門には胡旋舞が彫刻されており、この墓群がソグド人墓であることはまず間違いない。ただし史書には六胡州は「突厥から降ってきた戸」と記されるので、六胡州の居住者は突厥人なのかソグド人なのかという問題が生じるのであるが、実はこれこそがソグド系突厥と考えるべきなのである。その後、六胡州は神龍3年（707）に設置された蘭池州に隸属したが、玄宗の開元9年（721）4月に蘭池州の住民は反乱を起こした。その反乱軍の中核を構成した人物の名を見ると、リーダーの康待賓をはじめ、康氏、安氏、何氏、石氏など、ソグド姓で占められている。これらもソグド系突厥であり、その居住地域から考えて彼らは主として牧畜業に従事していたと理解してよいであろう。

ソグド人は安史の乱の戦闘にも加わっており、『資治通鑑』巻222所引の『薊門紀乱』には、范陽方面での戦闘を記して「鼻の高い外国人が多数死亡した」と見える。このソグド人を、前述の康待賓の乱で蘭池州から移動させられた六州胡反乱軍に呼応したものと見る説もある<sup>(17)</sup>。そうだとすれば、彼らもソグド系突厥の一部と考えられる。

ソグド系突厥という概念を歴史学に導入する意義の一つは、それが沙陀の歴史を考える際に極めて有効だという点にある。沙陀、史書にはもともとは西突厥の一種族とされるが、その種族名が天山山脈東部の砂漠名に由来するともいわれるように、その地域に分布していたテュルク系の雑種の総称であろうと考えられてきた。この種族が本格的に中国に移住したのは九世紀初めのことであるが、やがてその中核は山西省の北部に移動し、9世紀後半の龐勛の乱を沙陀のリーダー朱耶赤心が平定し、その功績から李国昌の名を朝廷から贈られ、さらにその子の李克用の時代に山西省北部で唐末期の一大地方勢力にのし上がった。朱全忠が即位して五代最初の王朝後梁を建国すると、克用の子李存勗はこれと対立し、後梁を滅ぼして自ら即位して後唐を建国した。その後に続く五代の後晋・後漢の皇帝も沙陀の系譜から出ており、このように沙陀は唐末期～宋初期の歴史の舞台で重要な役割を果たしたのである。

さて、その沙陀が唐末に山西省北部にいたころ、史書はしばしばその勢力を「沙陀三部落」と称している。この三部落とは、史料からは沙陀・薩葛・安慶の三部落を指すことは明らかである。このうちの薩葛は索葛、薛葛とも表記され、この語がソグド語の同音異訳であることはすでに指摘されていたが、薩葛の具体的な姿は五代後晋時代のソグド人墓誌を分析した森部豊氏（「ソグ

ド系突厥」概念の提唱者の一人）によって明らかにされた<sup>(18)</sup>。その一つ「安万金の墓誌」には、彼の曾祖父・祖父・父・彼本人・息子の5世代にわたって索葛府の長官であったと刻されており、さらに夫人の「何氏の墓誌」にも長男の安元審が索葛府の官職に就任したと刻されていた。これによって、索葛の集落の長官が世襲されており、その集落は安氏と何氏というソグド人どうしの通婚がなされた集落であり、そしてそのソグド人集落は五代時代にも存続していたことが確認できたのである。したがって、薩葛が仮にソグドという語そのものの漢字音転写ではないにしても、それはソグド語の何らかの語の漢字音転写であることは間違いないといつてよいであろう。

このように、沙陀と総称される種族にはソグド人が多数入り込んでいるが、彼らもまたソグド系突厥と考えるべきであろう。

沙陀族の中心勢力は洛陽・開封方面に移動し、中原王朝として五代史の一角を担ったが、次の北宋期になると彼らの名は史料からはほとんど消えなくなる。このことは同時に、五胡以来の南モンゴリアと華北とで形成される地帯の勢力によって中国史の歴史的展開が決定されるという時代が、一旦は終焉したことを意味する。

また、五代期には、後晋が燕雲十六州の地（河北・山西・内蒙古の一部）を契丹に割譲した。これ以降は、契丹・女真・モンゴルという中国から見ればさらに外部の勢力が歴史的展開を決定するいわゆる「征服王朝」の時代を迎える。これらのことは、唐後半期・五代・北宋期にかけての時期が、中国史の一つの大きな転換期にあたっていたことを意味している。それならば、その転換は、具体的にはどのような社会的変容となって現れたのであろうか。

## 6 唐後半期の東アジアの変容

かつて桑原隲藏氏は、中国史のいくつかの時代の戸口統計をとり、それを華北と江南にわけて対比させ、次のような南北の人口対比率を示した<sup>(19)</sup>。

〔年 代〕	〔華北の戸数〕	〔江南の戸数〕
前漢・元始2年（西暦2年）	965万戸（9弱）	111万戸（1強）
西晋・太康元年（280年）	149万戸（7）	65万戸（3）
唐・天宝元年（742年）	493万戸（9半）	257万戸（3半）
宋・元豊3年（1080年）	459万戸（3半）	830万戸（6半）
明・隆慶6年（1572年）	344万戸（3半弱）	650万戸（6半強）

また、李濟氏は、中国を便宜上A地帯（河北・山東・山西・江蘇・安徽・河南・湖北・陝西・寧夏・甘肅省）、B地帯（浙江・江西・湖南・四川・雲南省）、C地帯（福建・広東・広西・貴州省）の三地帯にわけ、『古今圖書集成』に基づいて各地帯に城郭都市が築かれた時代的統計（春秋～明代）をとり、漢族の分布をさぐった。それによれば、A地帯に築かれた城郭都市のパーセンテージは、春秋・戦国期の数値が高いものの、どの時代でも大きな差はない。しかし、B地帯の城郭都市は唐・五代期に数値が上がり、明代には全体の40%強が築かれており、さらにC地帯は宋代に数値が上がりはじめ、明代には54%強の数値を示している<sup>(20)</sup>。

これら二つの統計的研究によって、われわれは、漢族は時代とともに華北から江南へ、さらに

それならば、唐・宋のこのような変容は、別の分野でどのような変化となって現れるであろうか。松井秀一氏は、唐・宋両王朝の国家歳入（税収入）における布帛量の比較を行い、次のような数値を示した<sup>(21)</sup>。

糸錦を出す郡県の丁の庸調の絹……740万疋

布を出す郡県の丁の庸調の布 ……1035万端

租の折納布（江南）……………570万端

租粟300万石の折充絹布 ……………200万（端・疋）

錦綺・羅・綾……………57万疋

絹.....1226万疋

紬 .....356万疋

絶……………12万疋（以上計1651万疋）

糸・綿……………2029万両

布 .....485万疋

また、かつて筆者は、唐宋・五代・北宋初期における絹帛類の貢献地を地図に載せてみたことがある<sup>(22)</sup>。貢献とは、地方官が管轄内の特産品を買い上げ、それを中央に送る財貨集中のシステムである。当然それは、生産地とほぼ重なるはずである。その結果、唐から宋へと時代が下るにつれて、絹織物（特に高級絹織物）の貢献地が黄河下流域から浙江省方面に大きく拡大・移動する傾向をつかむことができ、松井氏とほぼ一致する結論を得たのである。

ところで、この新興絹生産地には、五代十国時代には呉越という地方政権が成立した。『本朝文粹』巻7、書状には、日本から呉越王（公）に送った国書2通が採録されている。天暦元年（947）と同7年（953）に発せられた文書であり、そのうちの後者を掲げれば、次のとおりである。

蔣承勳來、投傳花札。蒼波万里、素意一封、重以嘉惠、歡惕集懷。抑人臣之道、交不出境、

錦綺珍貨、奈国憲何。然而、志緒或織叢竹之色、德馨或引沈檀之薰。受之則雖忘玉條、辭之恐謂嫌蘭契、強以容納。蓋只感君子親仁之義也。今拙微情、聊寄答信。以小為遺、到願檢領。秋初涼、伏惟動履清勝。空望落月、長係私戀而已。勒丞勲還、書不盡言。謹狀。 天曆七年七月 日 日本國右大臣藤原朝臣謹言

右丞相が唐の呉越公に贈るための書状 菅三品

蔣丞勲が来て、美しい書状を届けてくれました。大海原を越え、素直な気持ちを一封に託し、重ねて恵みを賜り、喜びも苦労も私の心に届きました。そもそも人臣の道というのは、国境を越えて交際するものではありません。錦や珍宝は、国の掟をどうするのでしょうか。しかしながら、あなたのお気持ちは草や竹の文様に織りなされ、あなたの徳は沈香や壇木の香りを引いています。これらを受け取れば天子の法をないがしろにしたことになりますが、かといって辞退すればおそらくは美しい交際を嫌うといわれるでしょう。そこで今は、あえて受け取っておきます。これはただ、あなたの仁に親しむ気持ちに感じるからであります。今、ほんの気持ちから、いささか返礼の品を贈ります。些細なものでも貴いとお考えになって、届きましたらどうかお受け取りください。初秋の涼しい候、思いますにあなたの生活ぶりはさぞ御清祥のことでしょう。空に沈む月を眺めながら、いつまでもあなたを慕う気持ちにとらわれるばかりです。蔣丞勲を帰します。手紙ですから言を尽くせません。謹状。

天曆七年七月 日 日本国右大臣藤原朝臣、謹言

ここに名に見える蔣丞勲とは、『日本紀略』後篇2、承平5年（935）9月条に、

大唐の呉越州の人、蔣承勲来たり、羊数頭を献ず。

とあり、同6年7月13日条に、

大宰府、大唐の呉越州の人蔣承勲・季盈張らの来著の由を申す。

と見える蔣承勲と同一人物もしくは親族と見られる。彼が日本にもたらした「錦綺」とは、呉越領内（上述の新興絹生産地）で織られた製品に違いない。そして、九世紀以降は新羅や唐の海商が盛んに東シナ海を往来したことを考えれば<sup>(23)</sup>、蔣丞勲もそうした貿易商人と見てまず間違いないであろう。成尋『参天台五台山記』の末尾、延久5年（1073）6月12日条には、「大宋皇帝より預かった日本に送ろうとする御筆の文書を、孫吉の船に運びおわたった」旨の記述が見える。宋代には、国書は民間商人の手によって伝達されたことがわかる。

寧波の天一閣には、博多に居住する中国人が寧波の仏寺の参道整備のために寄付をしたことを伝える石刻が三点所蔵されている<sup>(24)</sup>。そのうちの一点には次のように記される。

日本国の太宰府の博多の津に居住せし弟子の丁淵、十貫文を砌路一丈に捨身す。功德は、三界の諸天、十方の智聖、本宅の上代、本命の星官、見生の眷属、四惣の法界の衆生、同に仏果を生ずる者に奉献す。 乾道三年四月 日

乾道は南宋の元号で、その3年は1167年である。残る2点のうち1点は、次のように刻される（この碑の原文は刻面の左から右に行が進む）。

建州普城県より日本国に寄せる孝男の張公意、十貫を明州の礼拝路一丈に捨身す。功德は、亡考の張六郎、妣の黄氏の三娘、仏界に超昇する者に薦す。

これらはいずれも博多に移住した中国商人が、明州（寧波）の仏寺の参道のために寄付した記

念碑で、彼らは博多・寧波間の海上貿易にたずさわっていたのである。特に後者の出身地は福建の建州であり、想像以上に広範囲に活動していたことをうかがわせる。

博多の近郊には、たとえば櫛田神社・筥崎宮・善導寺などの境内に、かつては船の碇石として使用されていた長さ2メートルほどの石が保存されている。これらの碇石は、以前は遣唐使船のものと考えられ、その後は元寇船のものとも考えられていたが、原在では中世の貿易船が使用した碇石とするのが定説である<sup>(25)</sup>。

## おわりに

4世紀に始まる北方遊牧民族の移動は、東アジアでは五胡十六国を出現させ、以後その余波が、北魏の華北支配→六鎮の乱→唐の建国→対突厥戦勝利による世界帝国の出現→安史の乱→沙陀王朝の出現、というできごとを生じさせた。これらは一連の連鎖反応と見るべきなのである。そして、安史の乱と沙陀の中原王朝化によって、いったんはこの連鎖はとぎれる。しかし、それがさらに次代の征服王朝の時代を用意したのである。ただし、以上の連鎖反応のうち、唐の世界帝国化への道は、近年のソグド人関係出土遺物を見るかぎりでは、対突厥戦争の勝利という要因のみでは説明が不十分である。北魏末期以降のソグド人も含めた大きな民族の移動の波が唐という国を生み出してゆく姿を、今後は模索しなければならないであろう。

一方、このような歴史のうねりのなかで、中国においては、唐後半期から宋代にかけての時代に、漢族が南へと移住し、商工業の中心地帯も江南へと比重を移した。これは海上貿易の隆盛化と無関係ではないはずである。つまり、中国史における唐という時代は、ユーラシアの貿易体制が、内陸シルクロードを中心とする体制から海上貿易に比重を移してゆく、ちょうどその過渡期にあたるのである。それが、以後の時代の江南の人口増加と産業発展を促進したと考えられる。

日本古代・中世の対外関係も、以上のような東ユーラシアの歴史の展開にのせて考察されねばならないであろう。遣唐使が派遣されていた時代は、政府が国際舞台に出席することと、それによって入手される威信財で王権を強化することが最も重要とされた時代なのである。西突厥の可汗が、ソグド商権をおさえることによって威信を光り輝かせたと同じことが、日本の王権にも作用をおよぼしたに違いない。貴族権威を現出させる唐物の財貨や、天皇の唐物御覧、唐物分与などは、その一環であろう<sup>(26)</sup>。ところが、10世紀以降中国の海商が本格的に押し寄せるようになると、唐物はより広範囲の貴族層にまで行き渡ったであろう。それが、唐風文化と国風文化を形成すると思われる<sup>(27)</sup>。そしてそれは、中国における江南の絹織物・陶磁器などの産業の隆盛、および港湾都市の発展と、密接に関係しておこっているのである。『竹取物語』に登場する「火鼠の皮衣」の話などは、海商の時代を想定しなければ成り立たないはずである。また、『源氏物語』梅が枝の巻には、

源氏が薫物合わせをしようとして、大宰府の大貳が贈った香を見ると、昔の物と比べて品質が劣っているようだと思い、二条院の御倉を開けて舶来品を取り出させたところ、「錦・綾なども昔の物の方が良質だ」といい、またかつて高麗人が献上した錦・綾も今の世の物とは比べものにならないので、このたび大貳が献上した綾・羅などは女房たちに下賜された。

というシーンが描かれる。ここに見える昔の良質な錦・綾は、遣唐使が回賜品として持ち帰った、または渤海使節経由で宮中にもたらされた唐の最高級絹製品であり、このたび大武が献上した綾・羅などは海商によってもたらされたもので、背景には2つの時代の対比が存在しているのではないだろうか。

## 註

- (1) 松田壽男「絹馬交易に関する史料」(『松田壽男著作集』第2巻、六興出版、1986年)。
- (2) 荒川正晴「唐の対西域布帛輸送と客商の活動について」(『東洋学報』7313・4、1992年)。
- (3) 寧夏回族自治区固原博物館・羅豐編著『固原南校隋唐墓地』(文物出版社、1996年)、寧夏回族自治区固原博物館・中日原州聯合考古隊編『原州古墓集成』(文物出版社、1999年)、原州聯合考古隊編『唐史道洛墓』(勉誠出版、1999年)。
- (4) 寧夏固原博物館編著『固原歴史文物』(科学出版社、2004年) 114頁。
- (5) ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌訳注(2) 固原出土「史訶耽夫妻墓誌」(唐・咸亨元年)」(『史滴』27、2005年)。
- (6) ソグド人墓誌研究ゼミナール「ソグド人漢文墓誌訳注(4) 固原出土「史鉄棒墓誌」(唐・咸亨元年)」(『史滴』29、2007年)。
- (7) 山西省考古研究所等編著『太原隋虞弘墓』(文物出版社、2005年)。
- (8) 吉田豊「ソグド語雜録(Ⅱ)」(『オリエント』31-2、1989年)。
- (9) 荒川正晴「北朝隋・唐代における「薩宝」の性格をめぐって」(『東洋史苑』50・51、1998年)。
- (10) 陝西省考古研究所編著『西安北周安伽墓』(文物出版社、2003年)。
- (11) 西安市文物保護考古所「西安北周涼州薩保史君墓發掘簡報」(『文物』2005年3期)。
- (12) 程林泉・張翔宇「第七座有圍屏石榻的粟特人墓葬—北周康業墓」(『文物天地』2005年3期)。
- (13) 山下将司「隋・唐初の河西ソグド人軍団—天理図書館蔵『文館詞林』「安修仁墓碑銘」残巻をめぐって—」(『東方学』110、2005年)。
- (14) 昭陵博物館『昭陵碑石』(三秦出版社、1993年) 73頁、201頁。
- (15) 寧夏回族自治区固原博物館「寧夏塩池唐墓發掘簡報」(『文物』1988年9期)。
- (16) 森部豊「唐末五代の代北におけるソグド系突厥と沙陀」(『東洋史研究』62-4、2004年)。
- (17) 王義康「六胡州の変遷と六州胡の種族」(『中国歴史地理論叢』1998年4期)。
- (18) 森部豊「後晋安万金・何氏夫妻墓誌銘および何君政墓誌銘」(『内陸アジア言語の研究』16、2001年)。
- (19) 桑原隲藏「歴史上より観たる南北支那」(『東洋文明史論叢』弘文堂書房、1934年)。
- (20) 李濟『支那民族の形成』(生活社、1942年)。
- (21) 松井秀一「唐代における蚕桑の地域性について—律令制期の蚕桑関係史料を中心に—」(『史学雑誌』85-9、1976年)。なお松井論文は、宋代の統計については梅原郁「北宋時代の布帛と財政問題—和預買を中心に—」(『史林』47-2、1964年)に依拠している。
- (22) 石見清裕「唐の絹貿易と貢献制」(『九州大学東洋史論集』33、2005年)。
- (23) 呉玲「九世紀唐日貿易における東アジア商人群」(『アジア遊学』3、1999年)、山内晋次「九世紀東アジアにおける民衆の移動と交流—寇賊・反乱をおもな素材として—」(『奈良平安期の日本とアジア』吉川弘文館、2003年)など。呉越の対外貿易については、日野開三郎「五代呉越国の対中原朝貢と海上貿易」、特に第7章「海上貿易」(『日野開三郎東洋史学論集』第10巻、三一書房、1984年)、酒寄雅志「九・一〇世紀の国際関係を探る」(『新視点日本の歴史』3、古代編、奈良・平安時代、新人物往来社、1993年)。
- (24) 王勇「寧波に現存する博多在住宋人の石碑—その発見・転載・解説をめぐって—」(『アジア遊学』3、1999

年)。

- (25) 柳田純孝「海から出土した礎石」(川添昭三編『よみがえる中世1—東アジアの国際都市博多』、平凡社、1988年)。
- (26) 皆川雅樹「九～十世紀の「唐物」と東アジア」(『人民の歴史学』166、2005年)、河添房江『源氏物語と東アジア世界』(日本放送出版協会、2007年)。
- (27) 榎本淳一「『国風文化』と中国文化—文化移入における朝貢と貿易—」(池田温編『古代を考える 唐と日本』吉川弘文館、1992年。)